

バウムテストにおける「依存性指標」の探索

人間科学研究科 博士前期課程2年 佐久間 博子

1. 依存について ～従来の依存～

従来、依存は薬物依存症や依存性パーソナリティ障害など病理の名称に用いられることがあり、ネガティブなイメージのものとして捉えられる傾向があった。今回の調査では、「依存症」と「依存性」を区別し、研究を進めていく。

従来、「依存」の反対は「自立」と捉えられる傾向があり、依存的でなくなっていくことによって自立性が獲得されていくとされていた(江口, 1966)。依存性の定義は、「幼児的な傾向で成長につれて減少していくもの」とされており、幼児期を脱しても「依存的」であることは問題視されていた。

それに対し、江口(1966)は、「依存性とは人間にとって本質的な傾向であり、“精神的な支えを求める”という機能は生涯人間につきまとうものである」と述べている。その後、自立という現象が依存の変形または成熟した状態であると、その考えが日本の発達研究で一般的に扱われるようになった(高橋, 1968ab; 1970)。

江口(1966)は、それまでの依存性の研究を概観し、依存概念の再検討を行った。その結果、依存には①従来のいわゆる「依存的」な状態、②適度に依存している状態、つまり自立性の獲得されていく状態(青年期では自立している状態)、③依存要求の欠如している状態、の3側面があるとした。それをもとに、関(1982)は、依存性を「依存欲求」だけでなく、成熟した適応的な依存性のあり方としての「統合された依存性」、適応上の問題を含む依存のあり方としての「依存の拒否」という3つの変数で説明を行った。今回の調査では、依存性とバウムテストの関連の検討を行う。バウムテストは描き手のパーソナリティが全体的・多角的に表れる。描き

手の各依存性の持ち方を理解することで、パーソナリティを包括的に理解することが可能となるため、従来の一義的な依存性と区別して関(1982)の依存を採用して研究を行う。

2. バウムテストについて

バウムテストとは、Koch(1957)によって体系化された描画法である。描かれた木の絵から、描き手のパーソナリティを推し測ろうとする心理検査の一つであり、被検者が無意識のうちに感じている基本的な自我像(高橋・高橋, 1986)や、外界との関係などが投影されると言われている。バウムテストでは、質問紙と比べ、無意識的な内面が投影されやすいとされている。そのため、描き手をより多層的・全人的に知ることができる。依存性は、自ら意識しにくい面があると推測されるため、投影法であるバウムテストに表れる「依存性」と、質問紙の結果との関連をみることで、意識的側面と無意識的側面の関連や特徴を測ることができると考えられる。

現在、依存性を示すバウム指標は数えられるほどしかなく、「依存欲求」のみに言及されている。そのため、関(1982)の3つの依存性を説明できる指標は未だ説明されていない。

3. 本研究の目的

今まで「依存性」は、バウムテストの描画指標において、従来の依存性概念である「依存欲求」のみに着目されており、分類して検討されてこなかった。しかしながら、「依存性」には他側面があることが示されている。そこで本研究は、依存性を、従来の依存性概念である「依存欲求」に加えて、「統合された依存性」、「依存の拒否」の3変数で捉え、質問紙調査及びバウムテストを施行し、女子大学生の依存性に関する基礎的データの収集、及びバウムテストにおける「依存性指標」を探索することを目的とした。

4. 方法

先行研究に基づき、大学生を対象に質問紙調査及びバウムテストを行った。

調査協力者は神戸女学院大学に通う19歳～22歳の女子大学生計46名であった。「イメージの心理臨床学」、「演習 I BIクラス」、もしくは「演習 II B Hクラス」を受講しており、講師と筆者との依頼に応じて回答を行った。有効回答者は46名（平均年齢20.57歳、 $SD = 0.89$ ）であった。調査期間は、2022年10月～11月であった。調査方法は、質問紙調査及びバウムテストを行った。バウムテストの教示内容は、「今から絵を描いてもらいます。木を描いてください。時間制限はありません。上手、下手は関係ありません。」というものであった。質問紙調査後、全員が回答を終了したのを確認して、バウムテストを一斉に開始した。なお、本研究は学内の倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号22-10）。

依存性についての質問として、関（1982）が作成した「依存性の自己評定尺度」を使用した。バウムテストの分析方法には、坂本ら（2012）が考案したスポットライト分析を用いた。

5. 結果

依存性と関連が予測される部位として、「根」、「地面線」、そして幹の下方から著しく「根元が広がった幹」（以下、「根の開き」）、「枝の有無」、「幹模様の有無」、「幹上端の閉鎖」、「樹冠外枝の有無」、「輪郭線が複数線で描かれるか否か」、「樹冠輪郭の閉鎖」、「幹下縁立の有無」、「枝がのびのびと伸びている印象」、「バウムの浮き感」、「バウムの輪郭が閉じている印象」を挙げ、関連を検討した結果、いずれの部位にも関連が見られないことが明らかとなった。

その後、得られたバウムのクラスタ分けを行い、各クラスタについて特徴考察と個別にバウムの検討を行った。その結果、6つのクラスタにバウムが分けられ、各特色が見られる可能性が考えられた。

6. 考察

各依存性とバウム部位の関連が見られなかったことについて考察を行う。今回、バウム部位のありなしで検証を行ったが、バウムに描かれる部位は個人によって多様性が見られる。指標によって読み取れる解釈は各々異なるため、バウム部位のありなしは各依存性に影響を及ぼさなかったと考えられる。さらに、バウムテストと質問紙によって表れる描き手の無意識的側面と意識的側面にズレが見られたことが予測される。バウムテストには描き手の無意識的側面が表れるのに対して、質問紙は意識的な側面が表れることが考えられる。そのため、描き手が意識的に認識しているパーソナリティとバウムに現れるパーソナリティに差が見られた可能性が考えられる。

クラスタの特徴考察を行った。表1に示す。

7. 総合考察

今回の調査の結果より、描き手が依存性を向ける対象には「場」への依存と、「人」への依存という二種の依存対象が見られることが考えられ、未分化な対象から分化した対象へと移行することが考えられた。この視点が生まれたことで、従来の依存欲求的な意味を持つ「場」への依存は、先行研究と同じくバウム下端部に表現される可能性が考えられ、対人的依存である「人」への依存は、幹上端やバウムの輪郭線に表れる可能性が考えられた。

最後に、各依存性について再検討をおこなった。その結果、依存欲求の表現は、バウム下端部の「場」に向けられるものと、幹上端に向けられる「人」に向けられるものの二種があることが考えられた。統合された依存性の表現は、バウム下端部の「場」に向けられて表現されることが考えられた。依存の拒否の表現は、バウムの閉じた印象に表現されることが考えられた。

表1 場面1から場面6の内容

		依 続 拒	該当者数	特徴
クラスタ1	高低	● ○	n=7	自らの依存欲求に無意識的である可能性。依存先として「場」を持っているが、自分がどのように見られるかを気にしている。自らの依存欲求に意識的でないため、対人関係に相互的にエネルギーを注いでいない。
クラスタ2	高低		n=12	自らの依存欲求に無意識的である可能性。対人関係にエネルギーを注ぐ様子が見られないが、依存先として「場」を持ち、そこに収まることができる。バウムの描き方が枠にはまっている。
クラスタ3	高低	▲	n=5	自身の衝動や本能的な部分に大きなエネルギーを注いでおり、対人関係にエネルギーを注ぐ様子が見られない。依存先として「場」を持っており、依存への不安は低い。一方、自らの依存欲求に無意識的で、自身の本能的な欲求に目が向いている。
クラスタ4	高低	● ○ ▲	n=4	対人関係による摩擦や傷つきの経験によって、人との関わりに不安を表現している。依存先として「場」は持っているが、対人関係にエネルギーを注ぐ様子は見られない。
クラスタ5	高低	○ ▲	n=9	「人」との関わりに不安を持ち、適応感を抱いていない可能性。対人関係にエネルギーを注いでいるが、必死な様子や未熟な印象を受ける。依存に「場」や一応「個人」を持つ可能性が考えられる一方、適応感が見られず、不安や孤立感を感じている。
クラスタ6	高低	○ ▲	n=9	他者と関わりに不安を抱き、不安定感を抱いている。人や外界との関わりを避けようとする印象を受け、対人関係にエネルギーを注ぐ様子が見られない。依存先として、「場」も「個人」もなく、内向的で引きこもり傾向がある。

8. 引用文献

- 高橋雅春・高橋依子（1986）. 樹木画テスト. 文
教書院
- 江口恵子（1966）. 依存性の研究 教育心理学
研究, 14, 45-58.
- Koch, K. (1957) *Der Baumtest: der*
Baumzeichenuersuch als Psychodiagnostisches
Hilfsmittel 3. Auflage. Bern: Hans Huber. (岸
本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男（訳）(2010).
バウムテスト[第3版] ー心理的見立ての補
助手段としてのバウム画研究 誠心書房)
- 関 知恵子（1982）. 人格適応面からみた依存性
の研究-自己像との関連において 京都大
学教育学部心理教育相談室臨床心理事例研
究 9, 230-249.
- 高橋恵子（1968）. 依存性の発達的研究 I - 大
学生女子の依存性 - 教育心理学研究, 16,
7-16.